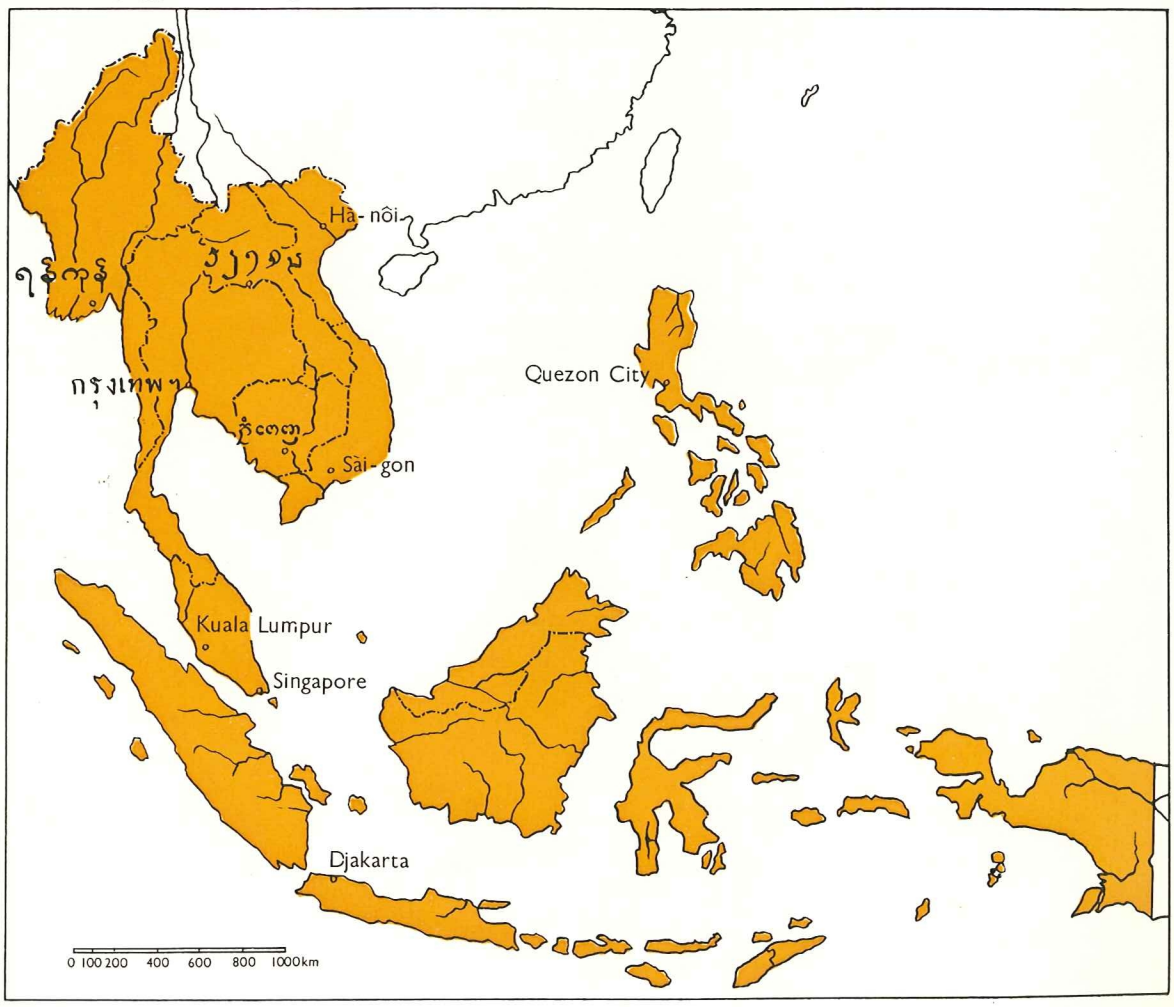
東南アジア研究センター所報（Ⅳ）

1966/1967

京都大学

東南アジア地域


Hà-nôi
Quezon City
Sài-gon
Kuala Lumpur
Singapore
Djakarta
0 100 200 400 600 800 1000km

はじめに

京都大学東南アジア研究センター所長　岩村　忍

京都大学東南アジア研究センターは、1963年1月に学内措置として設置され、同年4月から東南アジア研究第1期5カ年計画にとりかかった。1965年4月、東南アジアの総合的地域研究を推進する組織として官制化され、生物構造研究部門が設けられたが、さらに1967年度予算で社会構造研究部門と資料室との新設をみた。

第1期5カ年計画は1967年3月でもって、第4年度をおわった。社会科学部門の現地調査が前年度でほとんど終了したので、第4年度においては、現地調査の重点は自然科学部門におかれ、計26名のスタッフが東南アジア諸国に派遣された。現地調査研究の成果は、研究例会で報告されるとともに、季刊誌『東南アジア研究』にその中間報告が掲載されている。養成計画として、インドネシア・フィリピン・カンボジアに1名ずつ留学生を派遣した。交流計画も幅広く行なわれたが、第3回国内シンポジウム ≪東南アジアにおける医学≫は、このテーマにかんしてわが国ではじめての企画であった。図書資料整備計画も着実にすすみ、出版計画も順調に進行している。

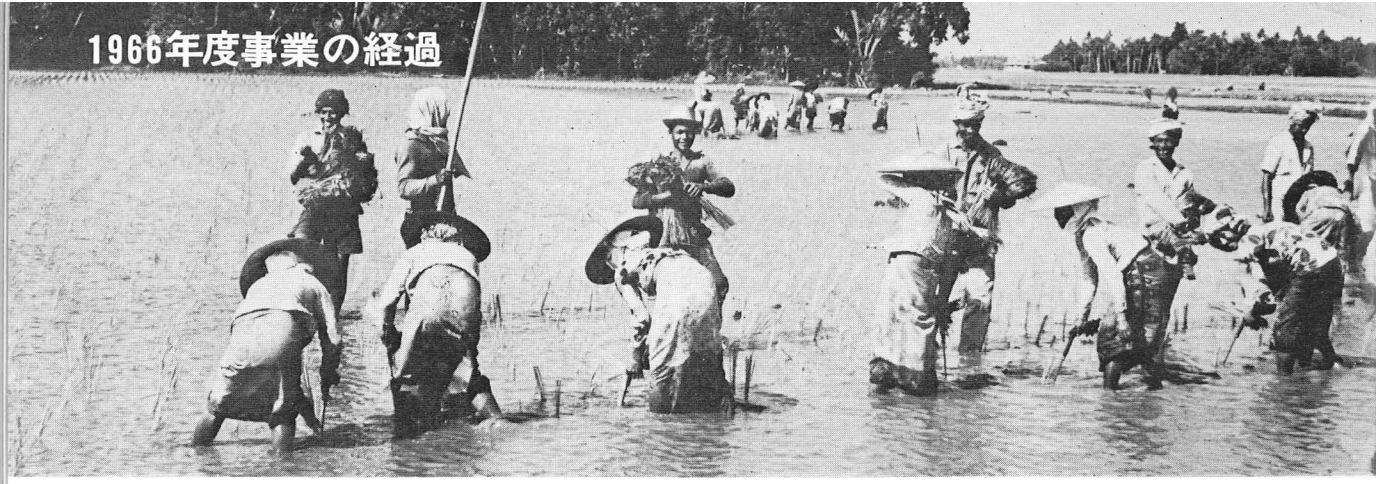
これらの事業のほか、マラヤ大学への外務省寄贈「日本研究講座」、コロンボプランによるタイ医療協力、アジア開発銀行などへ専門家を斡旋し、東南アジア援助計画に協力することができた。

1967年4月から、第1期5カ年計画の最終年に入る。本年度は、現地調査として文部省海外学術調査経費により、タイ・マレーシア生物相調査のチームを送るが、主として第1期計画のとりまとめと、調査報告の出版に全力をそそぎたいと思う。

今日まで計画がほぼ予定どおり進行しえたのは、内外の関係者の厚情のたまものであると深く感謝している。ここに、心から御礼申しあげるとともに、今後の努力を誓う次第である。

1967年6月30日

1966年度事業の経過



調査研究事業

東南アジア研究計画はその基本原則としてフィールド・ワークに重点をおく。1966年度の現地調査としては、前年度から繰り越された社会科学部門の調査も行なったが、主として自然科学部門の調査をすすめた。参加したスタッフは26名である。

Ⅰ 現地調査

A 社会科学部門

1. タイ地域調査

村落調査は1966年度で終了した。2カ年にわたりビルマ国境のカレン族の現地調査に従事した飯島茂助手（東南ア研）は、ひきつづき、イギリス・アメリカでカレン族の文献調査を行ない、11月帰国、同じく2年間東北タイ農村で社会構造の変動過程について調査をすすめていた水野浩一研修員（東南ア研）は8月に帰国した。タイ地域調査の新しいプロジェクトとして、石井米雄助教授（東南ア研）は、5月からバンコクの国立図書館および国立古文書館所蔵の古文献を利用して、19世紀後半におけるタイ国のいわゆる農奴制の崩壊過程にかんする研究を行なった。

2. マレーシア地域調査

ジョホール州エンダウの非イスラムマレー人集落に定着していた前田成文大学院学生（文学研究科）は調査を終えて5月に帰国した。

3. 政治構造と法律にかんする研究

インドネシアの軍政関係の現地調査をすすめていた神谷不二教授（大阪市大法学部）は6月に帰国した。本年度から法律制度にかんする調査が始められ、溜池良夫教授と川又良也教授（法学部）は3月から1カ月間タイ・マレーシア・フィリピン・インドネシアにおいて、比較研究の資料を収集した。

B 自 然 科 学 部 門

1. 医　薬　班

(1)　精神障害にかんする研究

加藤清助教授と笠原嘉講師（医学部）は、11月に、タイ国の各地の精神病院において精神障害者の調査研究を行ない、クロス・カルチュラルな研究のための第一歩をすすめた。

(2)　口腔疾患にかんする研究

前年度の美濃口玄教授(医学部)らのタイ・カンボジアにおける調査につづき、本年度は小野尊睦助教授、佐藤匠助手、天野義彦助手（医学部）が、比較研究の地域を拡張し、8～10月、タイ・インド・セイロンにおいて飲料水中の弗素の歯牙におよぼす影響を調査した。

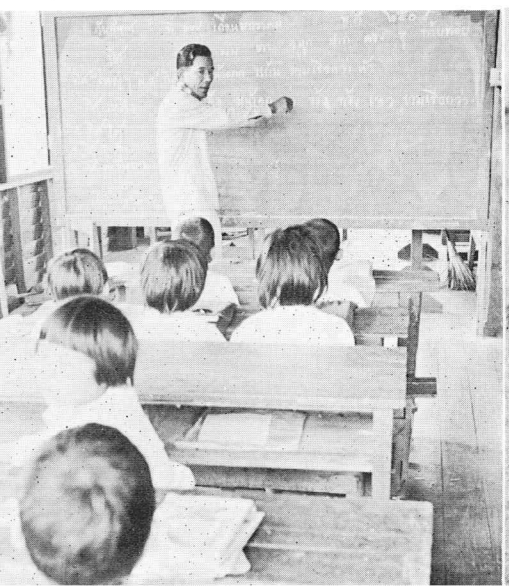
(3)　呼吸器疾患にかんする研究

東南アジアの呼吸器疾患にかんする研究は、1964年度よりつづけられているが、本年度は前川暢夫助教授（結核胸部疾患研究所）が8月にカンボジアで肺結核化学療法における初回耐性例の分布状況の調査を、佐川弥之助講師（結核胸部疾患研究所）が12月にタイにおける肺機能低下例の調査を行なった。

(4)　生薬生産にかんする研究

本研究は、1963年度、当時の生薬学教授木村康一博士によってはじめられたが、本年度は、木島正夫教授（薬学部）が11月にタイおよびホンコンで生薬生産状況の調査を行なった。

▼ タイ語で授業をするカレンの小学校（タイ北部）



▼ あそぶ子供達（タイ南部）

▲ 出歯けずりがうまい村の歯医者（タイ南部）

▼ 種痘をうける小学生（タイ東北部）

2. 地　学　班

(1)　非鉄金属資源ならびにその製錬にかんする研究

本主題について1964年にタイ・マレーシアで調査を行なった森山徐一郎教授（工学部）は、本年度10月、ふたたびマレーシアにおもむき、スズの製錬について調査した。

(2)　火山性地すべりの調査

環太平洋火山帯に属するフィリピンとインドネシアの火山性地すべりの研究のため、山口真一教授は7月に現地予察を行なった。

(3)　メナム沖積平原の形成過程にかんする調査

東南アジアの河川の沖積平原の形成過程にかんする地質学的研究のために、まずタイのメナム沖積平原をとりあげた高谷好一研究生（工学部）は、8月いらい、チュラロンコーン大学を基地として現地調査を続けている。

3. 農 業 生 産 班

(1)　熱帯水田土壌にかんする研究

1963年度から国際稲作研究所の財政的援助のもとに、タイ・マレーシア・セイロンで、熱帯水田土壌調査研究を行なってきた川口桂三郎教授（農学部）は、本年度は久馬一剛助手（農学部）とともに11月から翌2月にかけ、東パキスタン・カンボジアにおいて、調査を行なった。この研究の一環として、松尾嘉郎助教授（農学部）は8～9月、タイ・マラヤ・カンボジアの水田の湛水期における土壌分化の様相を調査し、また服部共生助教授（京都府大農学部）は1～2月、渡部忠世助教授（京都府大農学部）とともに、北タイの土壌の立地学的研究を行なった。

▼　豚の餌をつくるカレンの少女（タイ北部）

▲ 竹できずかれた昔ながらの取水堰（タイ北部）

▼ かんがいによる乾季のすいか栽培（タイ中央部）

(2) 水稲の植物栄養学的研究

1965年度からタイにおいて研究を行なってきた福井捷朗大学院学生（農学研究科）は1966年6～翌2月、タイ米穀局技術部試験場を基地として、主としてメナム沖積平原における水田の窒素天然供給量や水稲の生育相の研究をつづけた。なお、高橋英一教授（農学部）は8～9月に、タイ・マラヤ・カンボジアの水稲について、アミノ酸代謝を中心とした研究を行なうとともに、福井大学院学生の研究を指導した。

(3) 水稲の病害にかんする研究

1965年度にタイ・マレーシア・カンボジアにおいて、主として出穂前の病害を研究した赤井重恭教授（農学部）は、本年度は11月に、タイ・マラヤ・フィリピンで出穂後の病害を調査した。

(4) 農業水利にかんする研究

冨士岡義一教授（農学部）は海田能宏大学院学生（農学研究科）とともに、3月から2カ月のあいだ、タイ・マラヤの農業水利開発方式ならびに水田用水の合理的利用と末端配水組織にかんする調査を行なった。

(5) 家畜改良にかんする研究

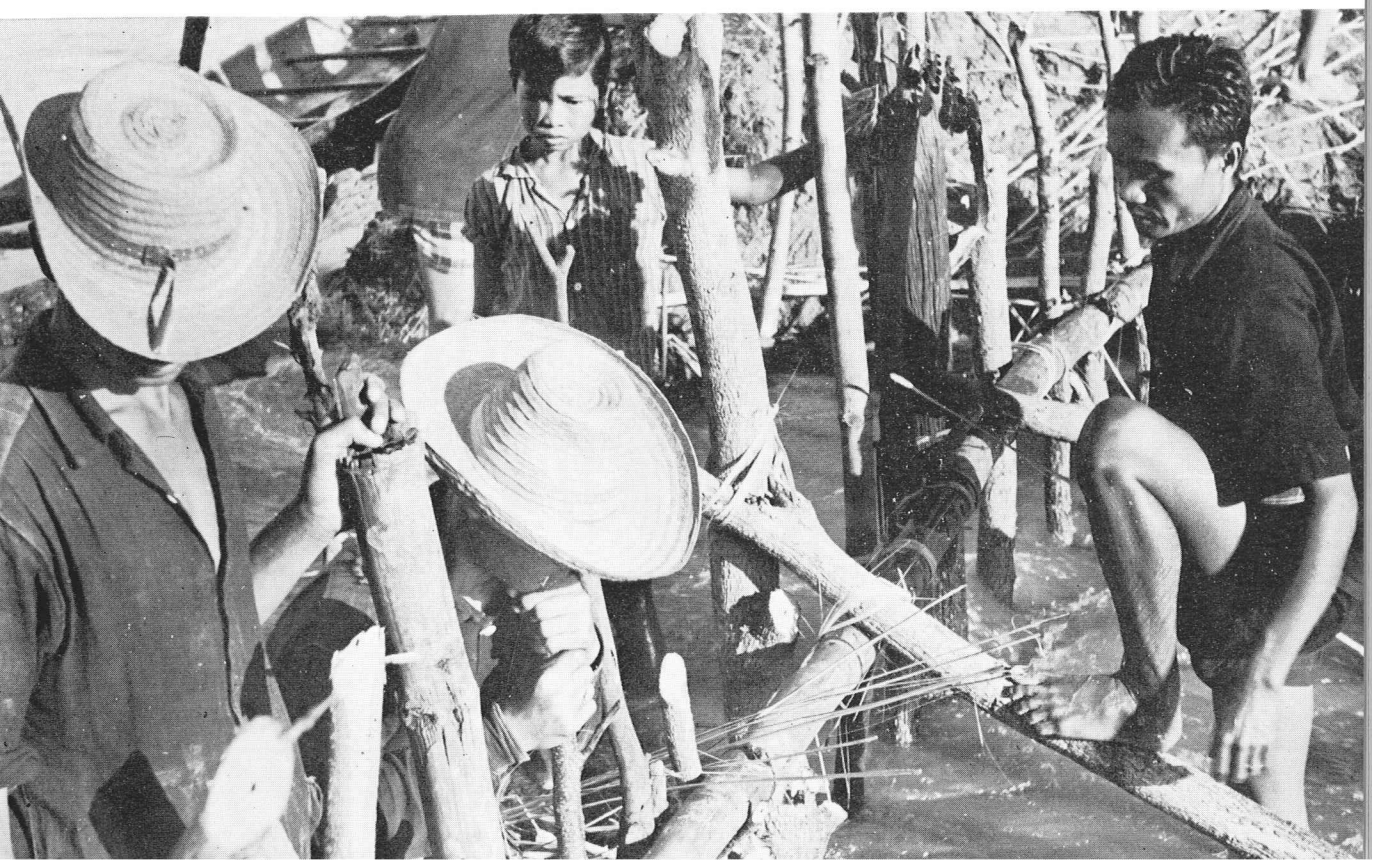
前年度にタイ・マレーシア・カンボジアの家畜改良にかんする研究を進めた西川義正教授（農学部）は、研究の重点をマラヤにおくことにきめ、2月にマラヤに赴き、家畜改良研究の基礎方針をたてた。その指導にもとづいて佐々江洋太郎大学院学生（農学研究科）は、現在ジョホール州のクルアン畜産試験場に滞在し研究中である。

(6) 木材にかんする研究

南方材の輸入がわが国にとって非常に重要になってきている事情にかんがみ、貴島恒夫教授（木材研究所）は、10～11月にタイ・マレーシアで木材生産利用状況を予察し、あわせてクアラルンプールにおけるマレーシア木材利用会議において講演した。

▲ チャイナートのかんがい用取水堰（タイ）

▼ 共同作業による村の堰つくり（タイ東北部）



Ⅱ 研 究 例 会

1966年度においては、第96回から第119回にいたる計24回の研究例会が開催された。

Ⅲ 調査研究計画のための予備調査

京都大学横田実事務局長は中村賢二郎庶務課長とともに1967年2月、タイ・カンボジアに赴き、東南アジア研究センターの活動状況を視察した。

Ⅳ バンコク連絡事務所

1966年度のバンコク連絡事務所の運営には石井米雄助教授があたった。日本からはもちろん、諸外国の訪問者が累年増加してきた。

養 成 事 業

1. 留学生

1966年度の留学生として下記3名が東南アジア諸国へ派遣された。

法 貴 誠　大学院学生（農学研究科）
農業機械学専攻　国際稲作研究所（フィリピン）

野 口 英 雄　大学院学生（工学研究科）
建築学専攻　バンドン工科大学（インドネシア）

坂 本 恭 章　助手（東京外大AA研）
クメール語専攻　カンボジア

2. 奨励金受給者

1966年度研究奨学生としてつぎの3名が採用された。

水 野 浩 一（東南アジア研究センター研修員）

坪 内 良 博（文学部研修員）
ただし、1966年5月1日づけで東南アジア研究センター助手に採用のため、4月末で打ち切られた。

高 谷 好 一（工学部研究生）

▲ 水祭りの行列（タイ北部）

交　流　事　業

1. シンポジウム

センター主催第3回国内シンポジウムとして、「東南アジア医学シンポジウム」が、10月1～2日、京都会館において、厚生省、海外技術協力事業団との共催の下に開かれた。このシンポジウムには、全国関係機関から、約100人の専門家があつまり、寄生虫、ウイルス性疾患、性病、結核の4部会に分かれて熱心な討議が交された。シンポジウムのプロシーディングは、『東南アジア研究』第4巻第4号として刊行され、その英語版である *Medical Problems of Southeast Asia*（仮題）が Symposium Series No. 4 として近く出版の運びとなっている。

2. 外国人専門家の招聘

本年度も、センターは欧米および東南アジア各地より多くの訪問者を迎え、海外学術研究機関との交流はますます盛んとなってきた。下記の諸権威の来日に際しては、とくにセンターに招いて、セミナーを開いた。

1966年7月　Dr. Saul Rose（オクスフォード大学）
1966年8月　Dr. Robert F. Chandler（国際稲作研究所長）
1966年12月　Dr. Ungku A. Aziz（マラヤ大学経済学部長）
1967年3月　Dr. Sumantri Brodjonegoro（インドネシア大学総長）

3. 東南アジア研究センターからの海外学会などへの出席

岩村所長は、1966年3～4月渡米し、HRAF理事会に出席するとともに、フォード財団を訪れ、またインディアナ大学など諸大学、研究機関を訪問して研究交流などにつき意見の交換を行なった。

西占貢教授（医学部）は、1966年1月に、インドのアグラにおけるアジア救ライ協会主催の国際ライ学会に出席した。

1966年12月にはビルマ問題の世界的権威であるニューヨーク大学の Frank Trager 博士を招聘してビルマ問題にかんする特別講演を依頼した。

またタイ国 National Research Council の Boonthom Dhamcharee 女史を招待し、タイ国における研究協力について意見の交換を行なった。

図書資料整備事業

1. ＨＲＡＦ室
　京大附属図書館に1965年７月ＨＲＡＦ室を開設していらい、利用者がちくじ増えてきた。

2. センター図書資料室
　研究計画の進展にともない、東南アジア関係の図書資料の収集をはかっている。

出　版　事　業

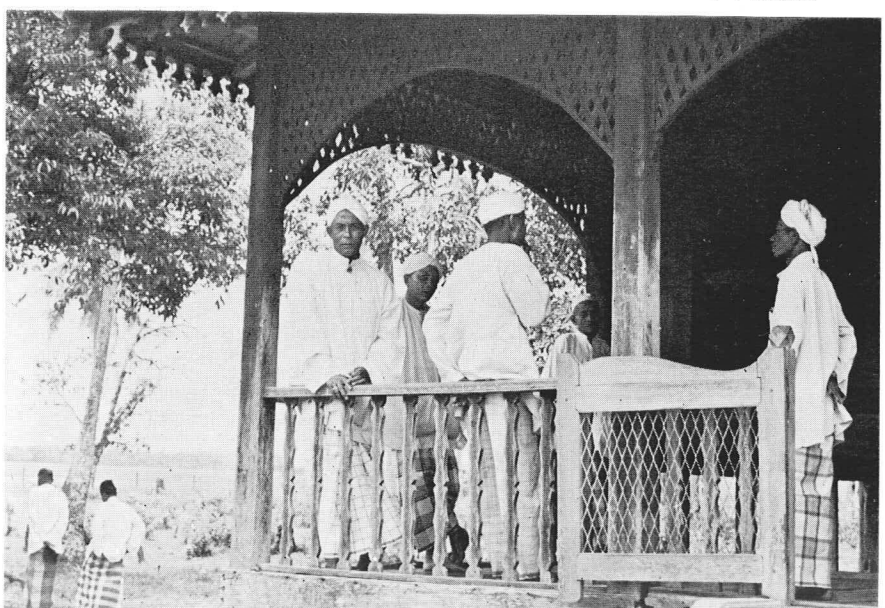
1. Reports on Research in Southeast Asia
　Social Science Series No. 1 としての前田清茂講師（天理大学外国語学部）*Alor Janggus, a Chinese Community in Malaya* と、Natural Science Series No. 2 としての渡部忠世教授（鳥取大学農学部）*Glutinous Rice in Northern Thailand* とが印刷中である。

2. Symposium Series
　Symposium Series No. 2; *Japan's Future in Southeast Asia* と、No. 3; *Water Resource Utilization in Southcast Asia* とが刊行された。

3. 季刊『東南アジア研究』
　第４巻第１～５号計５冊が出版された。

4. 所報
　『東南アジア研究センター所報1965/1966』が日英両文で刊行された。

▼ 金曜日に村のモスクにあつまる人々（マラヤ北西部）



タイとマラヤの婚礼

☆　タイ南部イスラム教徒の婚礼

▲星占いによって日どりがきまる

▼お祝いにあつまった人々

▲婚礼のクライマックス　新郎新婦が並んですわる

▼花婿の一行が通行税をはらいながらやってくる

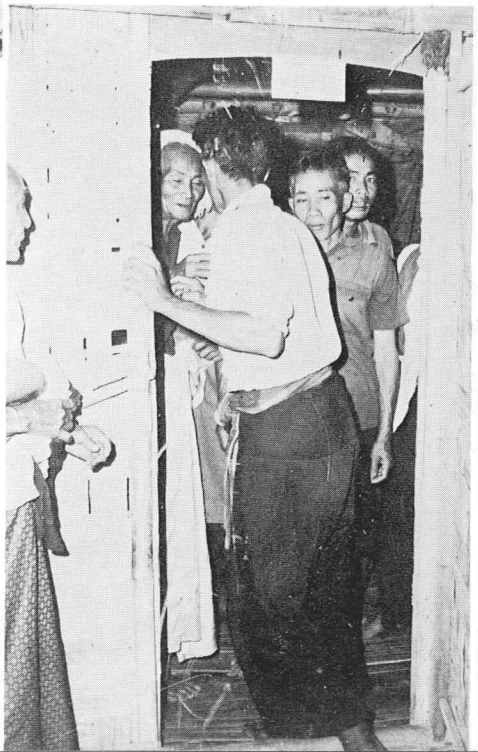
◀ 身なりをととのえる花婿

▲ むすめの衣装（左

☆ タイ北部

▲ 花婿の足をすすいで恭順の意をあらわす花嫁

▼ 花嫁姿に一瞬涙がうかぶ



花婿は押し問答の末花嫁の家へ入ることを許される ▶

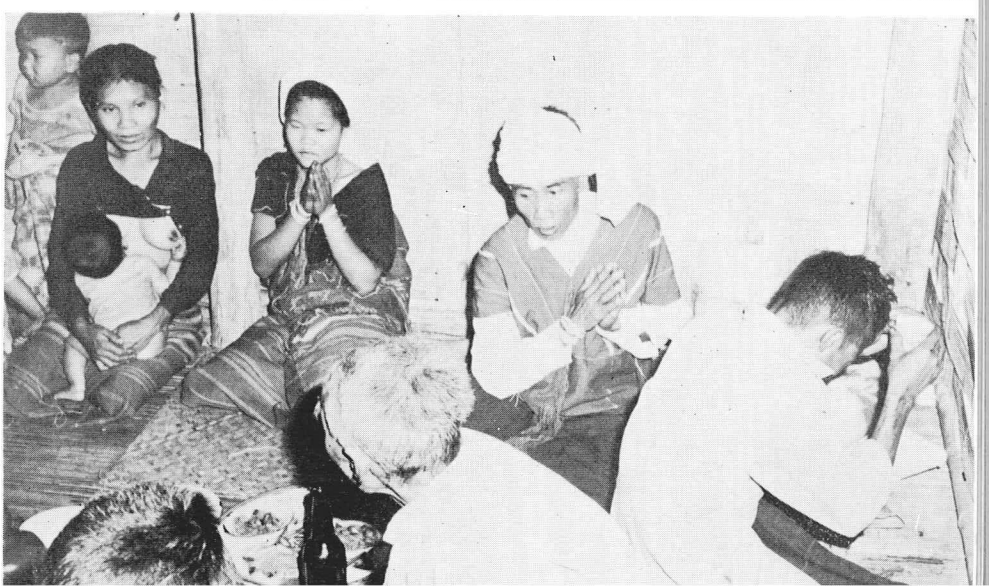
主婦の衣装（右）へ

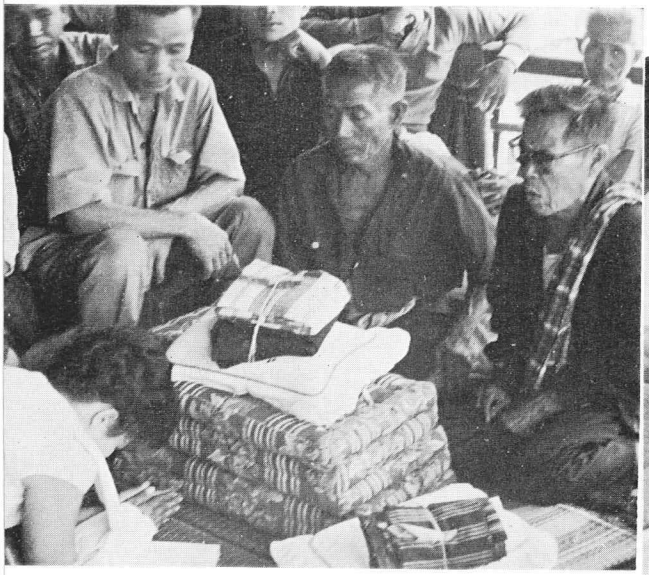
カレン族の婚礼

新夫婦誕生 ▶

祝いの宴 ▶

家の精霊に祈る ▼





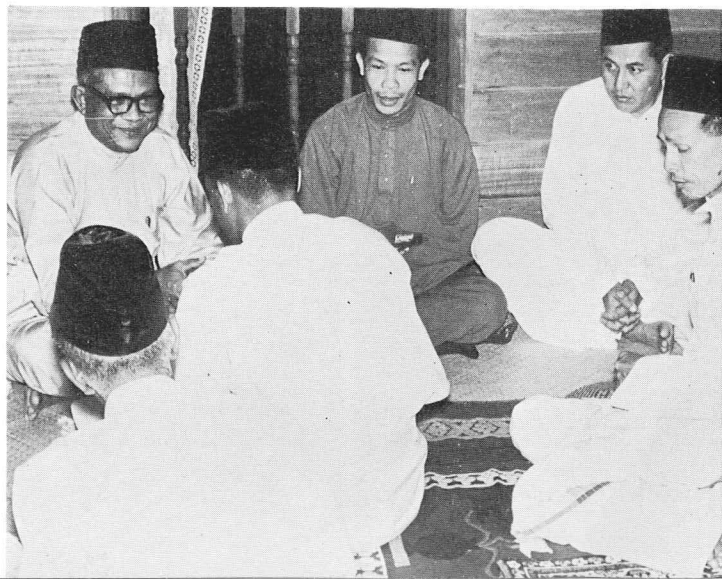
▲ 結納をうけとる娘（タイ東北部）

▲ 新郎新婦の縁がため（タイ東北都）

▲ サルタン風の衣装をつけた花嫁花婿（マラヤ北西部）

☆ 東北タイとマラヤの婚礼

▼ イスラム教による結婚契約式（マラヤ北西部）



1967年度事業の展望

1967年度は、東南アジア研究第1期5カ年計画の最終年度にあたる。現地調査は、若干の計画を残して、1966年度でほとんど予定通り終わった。1967年度は、研究成果のとりまとめと、第2期5カ年計画の準備に主力をそそぐ。

調査研究事業

Ⅰ 現地調査

1. タイ・マレーシア生物相調査

タイ・マレーシア生物相の調査をテーマに、文部省科学研究費補助金（機関研究海外学術調査）を受けることになった生物班では、芦田譲治理学部長をリーダーに、7月末から11月中旬まで、野外調査を行なう。

調査参加者はつぎの9名である。

芦田譲治理学部長：調査の総括と現地における折衝

平野実教授（教養部）：タイの渓水藻類

田川基二助教授・岩槻邦男助手（理学部）：タイとマラヤのシダ植物

福岡誠行大学院学生（理学研究科）：タイとマラヤの種子植物、植物地理

北川尚史助教授（奈良教育大）：タイとマラヤのコケ植物

清水建美助教授（信州大教養部）：タイとマラヤの種子植物、好石灰岩植物

小山博滋技官（国立科学博物館）：主としてタイの種子植物

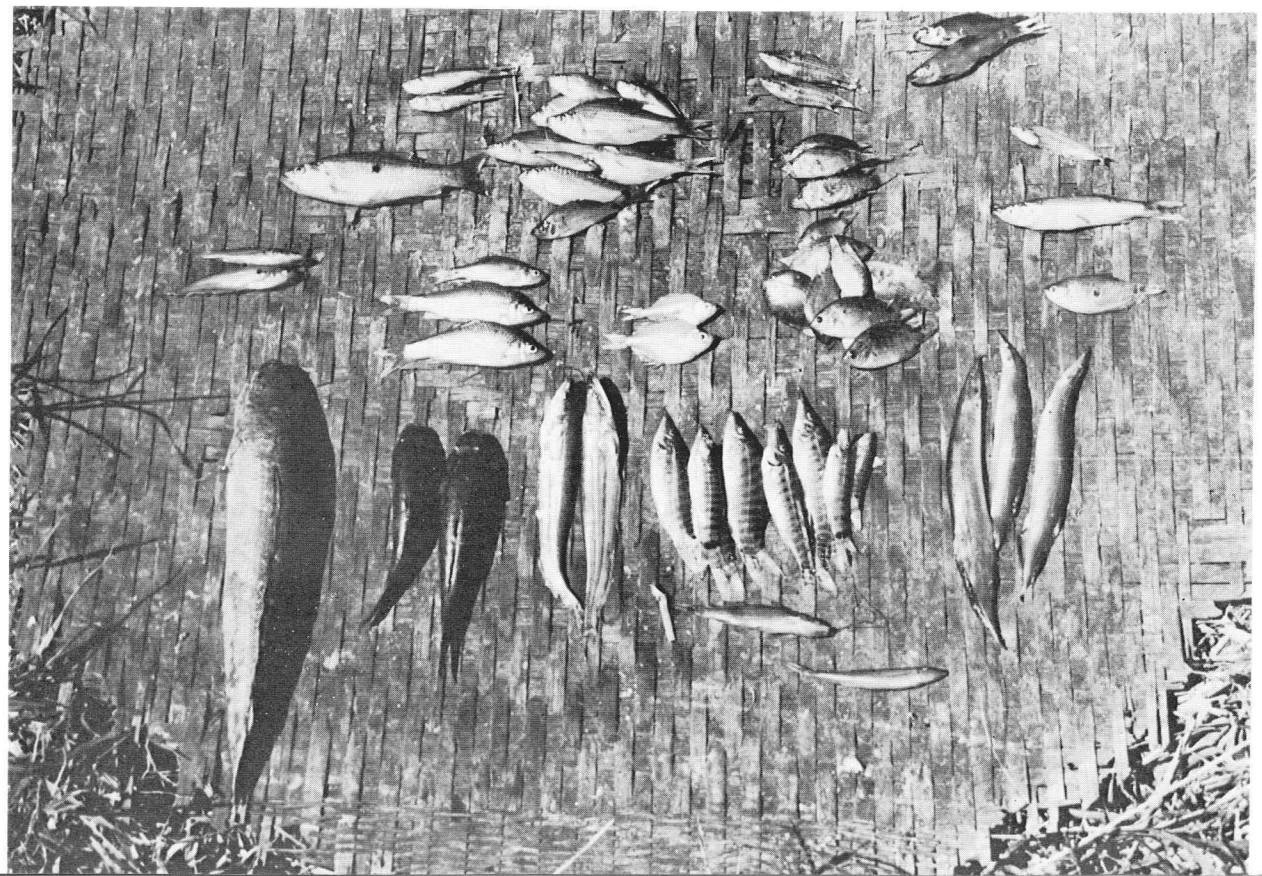
上野俊一技官（国立科学博物館）：主としてタイの昆虫類

医薬班の布藤昌一講師（京都薬大）は、現地において生物相の調査班と十分連絡をとりながら調査を行なう予定である。

生物相調査班は、タイ国では、前回の調査で得た資料の補充と再検討を主目的とし、森林局の Tem Smitinand 氏らと協力して調査を行なうことになっている。マラヤでは、タイ国半島部との比較のための資料を整えることを主目的とする。

▲ 村の取水堰で魚をすくう（タイ東北部）

▼ 川でとれた魚のいろいろ（タイ東北部）



今回の調査によって、これまでよく知られていなかったタイ国の高等隠花植物相は、近隣の地域以上に詳しく知られることになり、今後の植物学の進展のために重要な基礎資料を提供することになる。

2. メナム沖積平原の形成過程にかんする研究

前年度につづき、高谷研究生は、メナムデルタの形成過程の現地調査を5月末まで行なう。

3. 熱帯水田土壌にかんする研究

東南アジアおよび南アジアの稲作土壌の組織的調査と熱帯環境下における湛水土壌の物質変化の研究を目的とする本研究は、国際稲作研究所の研究資金により1963～4年のタイ国の調査いらい、昨年までにカンボジア・タイ・セイロン・東パキスタンで調査をすすめた。本年度は川口教授、久馬助手、古川久雄助手（農学部）によって1967年12月から1968年2月にかけインド東部の主要稲作地域の調査を行なう。すなわち、対象地域内において水稲生育パターン、収量、土壌母材、地形面などにより区分される各地区を決定し、ついで各地区の代表的土壌について pedological ならびに edaphological な現地調査を実施する。同時に土壌試料を採取し、京大農学部の研究室において地力の解明、稲作の改良上必要な室内実験をする。

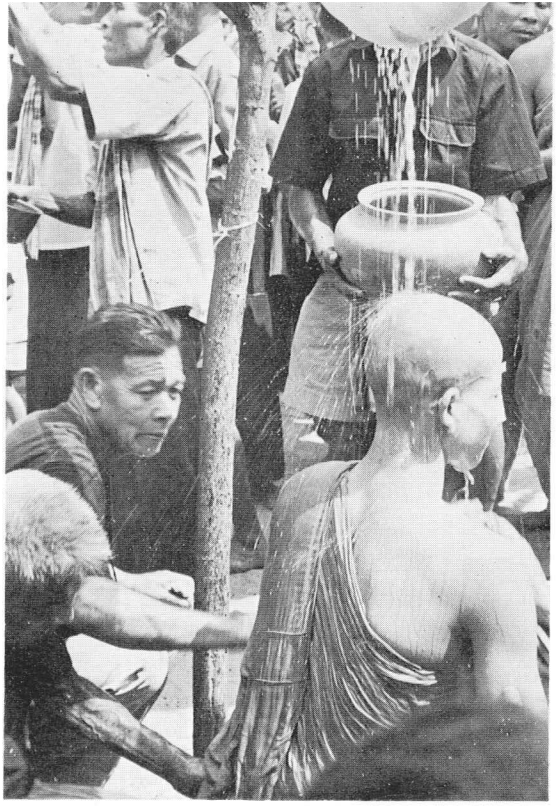
4. 東南アジアにおける水稲の植物栄養学的研究

福井捷朗助手（東南ア研）は昨年度につづき、バンケンのタイ米穀局技術部試験場に実験室を、メナムデルタの十数カ所に実験場をもって、本年度中、水稲の生育相と水田における窒素の天然供給状態を調査研究する。

5. 東南アジアの家畜改良にかんする研究

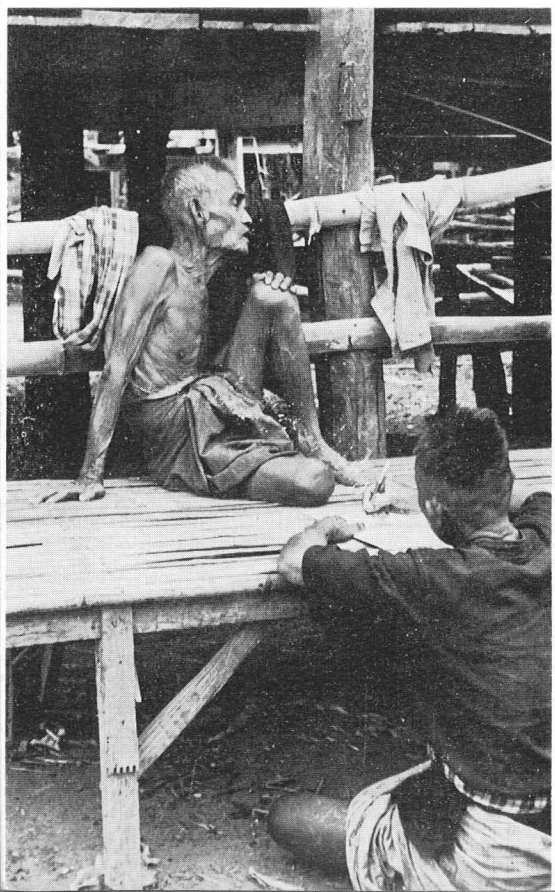
前年度から佐々江大学院学生は、マレーシア、ジョホール州のクルアン畜産試験場に6月末まで滞在し、家畜改良にかんする研究をつづける。

▼ 割礼の儀礼（タイ南部）　少年をのせて村中をねりあるく　川の精霊に祈ってから身をきよめる



▲ タイ東北部の水祭り

▼ 長老に教えをこう村の呪術師（タイ東北部）



Ⅱ 第２期計画のための予備調査

第２期５カ年計画をすすめるため、東南アジア諸国に約７名の関係者を短期間派遣し、実情調査・資料収集にあたるとともに、政府機関と交渉する。

Ⅲ バンコク連絡事務所

バンコク連絡事務所をひきつづき運営する。本年度は、福井助手が責任者となる。

養　成　事　業

1. 留　学　生

カンボジアでクメール語を研究している坂本助手は８月まで、バンドン工科大学で建築学専攻の野口大学院学生およびフィリピン、ロスバニヨスの国際稲作研究所で農業機械学専攻の法貴大学院学生は１月まで、それぞれ現地に滞在する。

三谷恭之研修員（文学部）は本年度のフルブライト留学生として、言語学研究のため、米国コーネル大学におもむく。

2. 奨励金受給者

1967年度研究奨学生として、つぎの２名が採用された。

高　谷　好　一（工学部研究生）
三　谷　恭　之（文学部研修員）

交　流　事　業

1. シンポジウム

1967年６月24～25日に、センターが派遣した農学関係者を集めて、「東南アジア農業技術」にかんするシンポジウムを行ない、農業技術改良の問題点とその対策を明らかにする。

また12月下旬には、「東南アジア農業開発」の経済的側面について、フリーな討議を目的として、10人ばかりの専門家からなるシンポジウムを開く。

2. 外国人専門家の短期招聘

諸外国との研究交流を密にし、東南アジア研究における各国の最新の成果をとり入れるため、1967年度には、約４名の外国人専門家をまねく予定である。

3. 東南アジア研究センターから専門家の欧米派遣

1967年4月に、岩村所長は、日米民間人会議出席を機会に、フォード財団、インディアナ大学など関係機関を訪問する。

8月ミシガン大学で開催される第27回東洋学者会議には、パネリストとして本岡武教授（東南ア研）を派遣する。

図書資料整備事業

1967年度予算で、センターに資料部の設置が認められた。これを機会に、HRAF室の整備と資料室の充実とに、いっそう努力したい。

出　版　事　業

1967年度は、Reports on Research in Southeast Asia 10冊、Symposium Series 2冊、東南アジア研究双書2冊、季刊誌『東南アジア研究』第5巻第1～5号、『東南アジア研究センター所報』邦文、英文各1冊、計21点の出版を計画している。

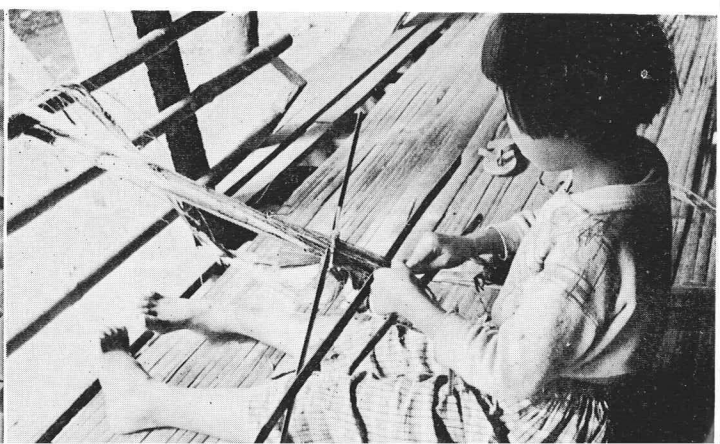
建　物　新　築

1967年度予算でもって、東南アジア研究センターのオフィスの新築が認められた。本年度内に延約 1,000m² の建物が京都大学本部構内に新築される予定である。

お　わ　り　に

1966年4月、東南アジア開発閣僚会議が東京で開催され、わが国は東南アジア開発協力に真剣にとり組みはじめた。しかし、わが国の東南アジアについての研究がいかに不十分であるかが痛感される。1967年度予算で社会構造研究部門と資料部門とが認められ、センターは2部門1資料室という構成になって、オフィスも新築されるはこびとなった。この組織を十分に生かすとともに、東南アジア研究をより組織的にすすめるためにセンターが所期の5部門1資料室まで拡充されることが望まれる。

▼ 機を織る山地民の娘とまねてあそぶ女の子（タイ北部）



東南アジア研究センター研究担当教官名簿

所属	職名		氏名	研究題目
東南アジア研究センター	所長（兼）	文博	岩村　忍	東南アジアの社会
	教授	農博	本岡　武	東南アジア諸国の農業開発
	助教授		石井米雄	タイ国近代史
	助手		坪内良博	マラヤ農村の社会構造
	助手		福井捷朗	東南アジアの水稲の栄養生理
文学部	教授	文博	泉井久之助	マライ・ポリネシア諸語の比較言語学的研究
	教授	文博	織田武雄	東南アジアにおける村落の研究
	教授	文博	池田義祐	東南アジアにおける家族および村落の研究
	助教授	文博	西田龍雄	東南アジア言語の研究
教育学部	教授	法博	相良惟一	東南アジアの近代化と教育の役割
	教授	文博	佐藤幸治	東南アジアにおける仏教（禅法）の比較研究
	助教授		森口兼二	東南アジアの近代化と教育の役割
	助教授		小田武一	東南アジア地域における教育内容
	助手		栗本一男	東南アジアの近代化と教育の役割
	助手		村田翼夫	同上
法学部	教授	法博	中田淳一	東南アジア諸国の比較法的研究
	教授	法博	畑茂二郎	東南アジアにおける国際関係
	教授	法博	猪木正道	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程
	教授		磯村哲	東南アジア諸国の比較法的研究
	教授	法博	平場安治	同上
	教授		溜池良夫	同上
	教授		福島徳寿郎	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程
	教授	法博	道田信一郎	東南アジア諸国の比較法的研究
	教授	法博	勝田吉太郎	東南アジアの諸国の政治思想の研究
	教授		西香茂	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程
	教授		川又良也	東南アジア諸国の比較法的研究
	教授	京大法博	上山安敏	同上
	助教授		永清敬次	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程
	助教授		園部逸夫	同上
	助教授		田節龍	東南アジア諸国の比較法的研究
	助教授		坂高正堯	東南アジアにおける国際関係
	助教授		松村岐夫	東南アジア諸国の比較法的研究
経済学部	助教授	経博	鎌倉昇	東南アジアの経済近代化の阻害条件
理学部	教授	理博	芦田譲治	東南アジアの植物の研究
	教授	理博	小沢泉夫	東南アジア地域における地震および地殻変動
	教授	理博	久保寺章	東南アジアの火山および地震の研究
	助教授	理博	田川基二	東南アジアの植物相の研究
	助教授	理博	吉川恭三	東南アジアにおける陸水の研究
	助手	京大理博	岩槻邦男	東南アジアのシダ植物相の研究
医学部	教授	医博	美濃口玄	東南アジアの飲料水中弗素量と斑状歯発症との関係
	教授	医博	西村秀雄	東南アジアにおける先天異常の研究
	教授	医博	西占貢	東南アジアにおけるらいの研究
	助教授	医博	加藤清	タイ国における精神障害者の精神医学的調査
	助教授	医博	小野尊睦	東南アジアにおける口腔がんの疫学的研究
	助教授	医博	岡田誠太郎	東南アジアにおけるらいの研究
	講師	医博	笠原嘉	タイ国における精神障害者の精神医学的調査
医学部附属病院	助手	医博	天野義彦	東南アジアの飲料水中弗素量と斑状歯発症との関係
薬学部	教授	薬博	井上博之	医薬資源としての東南アジアの植物の研究
	教授	薬博	木島正夫	東南アジアにおける薬用植物、生薬の調査研究
	助教授	薬博	秦清之	同上
工学部	教授	理博	本滝清	東南アジアにおける酸性火成岩に伴う鉱床の研究
	教授	工博	吉住永三郎	東南アジアにおける地下資源の探査
	教授	工博	向井滋	東南アジアにおける鉱産資源の選鉱に関する研究
	教授	工博	松尾新一郎	タイ国における土質、地下水に関する研究
	教授	工博	森山徐一郎	東南アジアの非鉄金属・希有金属資源ならびに製錬
	助教授		鈴鹿恒茂	東南アジアにおける酸性火成岩に伴う鉱床の研究
	助教授	工博	入江恒爾	東南アジアにおける地下資源の探査
	講師	理博	種雄	東南アジアにおける酸性火成岩に伴う鉱床の研究
	講師		河野伊一郎	タイ国における土質、地下水に関する研究
	助手		日下部吉彦	東南アジアにおける酸性火成岩に伴う鉱床の研究
	助手		中広吉孝	東南アジアにおける鉱産資源の選鉱に関する研究

所属	職名	氏名	研究題目
農学部	教授	農博 川口桂三郎	東南アジアの水田土壌
	教授	農博 来原正信	タイ国に適応せる農業簿記様式の研究
	教授	農博 赤井重恭	東南アジアにおける作物の病害に関する研究
	教授	農博 上坂章次	東南アジアにおける飼料中の微量元素含量の分布
	教授	農博 三井哲夫	魚毒性成分含有植物の探索とその成分の化学研究
	教授	農博 四手井綱英	東南アジアの自然環境の研究
	教授	農博 赤藤克己	東南アジアの稲品種の種生態学的研究
	教授	農博 長谷川浩	東南アジアにおける稲作に関する研究
	教授	農博 西川義正	東南アジア地域における家畜の生産性に関する調査
	教授	農博 沢田敏男	東南アジアにおける農業水利施設の研究
	教授	農博 冨士岡義一	東南アジアにおける土地水資源と農業開発
	教授	農博 原田橋浩一	南方材のきず（欠点）の組織構造に関する調査研究
	教授	農博 高橋英一	東南アジアの水稲の栄養生理
	教授	Ph.D.（ウィスコンシン大） 貝原基介	簿記調査に基づくタイ国農業経営の研究
	教授	西口猛	東南アジアにおける土地利用計画
	助教授	農博 田中正武	東南アジア地域の小麦の研究
	助教授	農博 堤利夫	東南アジアの自然環境の研究
	助教授	菊地泰次	タイ国に適応せる農業簿記様式の研究
	助教授	農博 細井寅三	東南アジアにおける生果物の生産調査
	助教授	農博 南勲	東南アジアデルタの塩害コントロールに関する研究
	助教授	阿部亮耳	簿記調査に基づくタイ国農業経営の研究
	助教授	農博 松尾嘉郎	東南アジアの水田土壌
	助教授	亀谷昱	簿記調査に基づくタイ国農業経営の研究
	助教授	佐伯浩	南方材のきず(欠点)の組織構造に関する調査研究
	助教授	北村貞太郎	東南アジアにおける農地開発計画
	助教授	飯島茂	東南アジアにおける農村社会の研究
	助手	京大農博 河津一儀	魚毒性成分含有植物の探索とその成分の化学研究
	助手	京大農博 久馬剛	東南アジアの水田土壌
	助手	京大農博 小林達治	東南アジア水田土壌中の窒素固定性微生物の探索
	助手	狭野和彦	東南アジアの自然環境の研究
	助手	海田能宏	東南アジアにおける土地水資源と農業開発
	助手	古川久雄	東南アジアの水田土壌
農学部附属演習林	助手	渡辺弘之	東南アジアの自然環境の研究
教養部	教授	柴田実	東南アジアの稲米儀礼
	教授	農博 山下孝介	南方栽培植物の特性とその導入に関する研究
	教授	文博 藤岡謙二郎	東南アジアの歴史地理学的都市地理学的研究
	教授	久米直之	南方植物の発生生理
	教授	理博 吉井良三	東南アジアのファウナ
	教授	大浦幸男	東南アジアにおける外国語教育
	教授	西村睦男	東南アジアの経済地理的研究
	教授	平野実	陸水産藻類の植物分類学的植物地理学的研究
	助教授	安藤昭一	東南アジア諸国における外国語教育
	助教授	尾崎雄二郎	東南アジアにおける中国諸方言の研究
化学研究所	教授	理博 水渡英二	東南アジアにおけるゴム加工の調査研究
人文科学研究所	助教授	文博 日比野丈夫	マラヤの華僑調査
	助教授	吉田光邦	マラヤの村落調査
	助手	船越昭生	マラヤの華僑調査
	助手	石毛直道	西イリアンの人類学的研究
結核胸部疾患研究所	教授	医博 長石忠三	東南アジアにおける結核の現状調査と結核外科の指導
	教授	医博 内藤益一	東南アジアにおける結核の疫学ならびに化学療法
	助教授	医博 寺松孝	東南アジアにおける結核の現状調査と結核外科の指導
	助教授	医博 前川暢夫	東南アジアにおける結核の疫学ならびに化学療法
	講師	医博 佐川弥之助	東南アジアにおける結核の現状調査と結核外科の指導
木材研究所	教授	農博 満久崇麿	南方材の調査および研究
	教授	農博 北尾弘一郎	同上
	教授	農博 貴島恒夫	同上
	教授	農博 山田正	同上
	助教授	農博 木村良次	同上

所属	職名	氏名	研究題目
木材研究所	助教授	農博 西本孝一	南方材の調査および研究
	助教授	農博 角谷和男	同上
	助教授	京大農博 佐々木光	同上
	講師	京大農博 佐藤惺	同上
食糧科学研究所	教授	農博 秦忠夫	東南アジアにおける食糧資源の開発と利用
	教授	農博 葛西善三郎	同上
	教授	農博 岩井和夫	同上
防災研究所	教授	工博 矢野勝正	東南アジアにおける水災害に関する調査研究
	教授	工博 石崎滝雄	東南アジアにおける構造物の暴風災害に関する研究
	教授	工博 石原安雄	東南アジアにおける水災害に関する調査研究
	教授	理博 山口真一	東南アジアの地盤地質と地すべり地の分布型の研究
	教授	農博 角屋睦	東南アジアにおける水災害に関する調査研究
	教授	工博 若林実	東南アジアにおける構造物の風害と震害に関する研究
	教授	工博 芦田和男	東南アジアにおける水災害に関する調査研究
	教授	京大工博 南井良一郎	東南アジアにおける構造物と地盤の震害調査
	助教授	理博 樋口明生	東南アジアにおける水災害に関する調査研究
	助教授	理博 中川博次	同上
	助教授	光田寧	東南アジアにおける構造物の暴風災害に関する研究
	助教授	Ph.D.(ブラウン大) 野中泰二郎	東南アジアにおける構造物の風害と震害に関する研究
	助教授	高田雄次	東南アジアの地盤地質と地すべり地の分布型の研究
	助教授	長尾正志	東南アジアにおける水災害に関する調査研究
	助教授	井上豊	東南アジアにおける構造物と地盤の震害調査
	助手	松井千秋	東南アジアにおける構造物の風害と震害に関する研究
	助手	鈴木有	東南アジアにおける構造物と地盤の震害調査
	助手	竹内篤雄	東南アジアの地盤地質と地すべり地の分布型の研究
	助手	古谷尊彦	同上
ウイルス研究所	教授	医博 東昇	東南アジアにおける熱帯ウイルス病の研究調査
	教授	医博 松本清一	狂犬病街上毒ウイルスの収集
	助教授	医博 井上幸重	東南アジアにおけるアルボウイルス感染症の研究

学外研究参加者名簿

所属	職名	氏名	研究題目
東京大学東洋文化研究所	講師	築島謙三	マレー人村落の自治体制と人倫意識
東京医科歯科大学教養部	助教授	京大理博 今立源太良	東南アジアにおける森林土壌動物
富山大学薬学部	教授	薬博 木村康一	東南アジアにおける薬用植物
信州大学農学部	助教授	菅誠	熱帯林の生態学的研究
〃 教養部	助教授	京大理博 清水建美	タイ国の石灰岩植物
名古屋大学医学部	講師	正垣幸男	東南アジアのフィラリア、マラリア、寄生蠕虫
大阪大学文学部	教授	甲田和衛	インド東南アジアにおける婚姻規制
大阪外国語大学	講師	大野徹	ビルマ系諸言語の記述的歴史的研究
〃	講師	矢野暢	タイ国南部の村落社会の変動
〃	講師	崎山理	インドネシアの言語
神戸大学教育学部	教授	高木太郎	東南アジアにおける教育制度
奈良教育大学	助教授	京大理博 北川尚史	東南アジアの苔類
鳥取大学農学部	教授	農博 渡部忠世	東南アジアにおける水稲栽培の作物学的研究
岡山大学農業生物研究所	教授	農博 小林純	東南アジアの河川の化学的研究
広島大学教育学部	教授	石堂豊	東南アジアにおける社会教育と教育事情
山口大学教育学部	講師	高木英明	東南アジアにおける教育制度
九州大学教育学部	助教授	綾部恒雄	東南アジアにおける教育文化の比較研究
長崎大学教養部	講師	中野秀一郎	東南アジア諸国における社会構造
京都府立大学農学部	助教授	農博 服部共生	東南アジアの水田土壌の鉱物学的研究
〃 教養課程	講師	水野浩一	タイ国東北部の村落社会の変動
大阪市立大学法学部	教授	京大法博 神谷不二	東南アジアとくにインドネシアの政軍関係
兵庫農科大学	教授	京大農博 佐藤孝	東南アジアにおける畑作の栽培学的研究
東北薬科大学	教授	薬博 高橋三雄	フィリピンとタイの薬用資源の化学的研究
東海大学文学部	文学部長(京大名誉教授)	文博 足利惇氏	東南アジアにおけるインド的要素
〃	講師	酒井敏明	東南アジアの人文地理

所　属	職　名		氏　名	研　究　題　目
早稲田大学社会科学研究所	講　師		増　田　　与	インドネシア現代史の理論構造
国際基督教大学	教　授		Newell, William H.	マラヤの中国人社会の研究
花園大学仏教学部	教　授		藤　吉　慈　海	東南アジアの仏教教団
竜谷大学文学部	助教授		口　羽　益　生	マラヤとインドネシアの社会構造
京都薬科大学	講　師	京大薬博	布　藤　昌　一	タイ国における生薬原植物の採集および研究
京都女子大学文学部	教　授		藤　原　利一郎	東南アジアにおける華僑発達史
京都産業大学教養部	教養部長 (京大名誉教授)	農博	上　田　弘一郎	東南アジアにおける竹林の生態学的研究
〃　経営学部	教　授 (京大名誉教授)	経博	堀　江　保　蔵	東南アジアの経済的近代化要因
橘女子大学	教　授		岩　本　　裕	インドネシアの歴史と文化
関西大学文学部	教　授		藤　本　勝　次	マラヤのイスラム社会
〃　工学部	教　授	工博	谷　口　敬一郎	東南アジアの地下資源の調査研究
追手門学院大学	教　授		山　口　三　郎	東南アジアの教育制度の比較研究
帝塚山大学教養学部	助教授		伊　原　吉之助	東南アジア近代化の比較史的研究
天理大学文学部	教　授		中　村　孝　志	南方華僑史
〃　外国語学部	講　師		前　田　清　茂	マラヤ村落における華僑
京大名誉教授	理　博		松　下　　進	東南アジアの地史学的研究
アジア救ライ協会	医務部長		戸　田　圓二郎	タイ国におけるらいの臨床的病理学的研究
国立科学博物館	文部技官	理博	上　野　俊　一	タイ・マラヤの好湿性昆虫相の研究
〃	〃		小　山　博　滋	タイ・マラヤの種子植物の分類地理学的研究
天理よろず相談所	肺外科部長	医博	山　本　利　雄	東南アジアにおける肺心臓外科の現状調査
マラヤ大学	講　師		前　田　成　文	マレー人社会の文化人類学的研究
タマサート大学	講　師		桂　　満希郎	タイ国におけるアカ語の研究

東南アジア研究センター既刊行物リスト

1967年6月30日現在

Ⅰ　季刊『東南アジア研究』(1963年6月発刊)
　　第1巻第1号～第5巻第1号 (通巻19号)

Ⅱ　年刊『東南アジア研究センター所報』(1964年6月発刊)
　　No. 1 (1963/64)～No. 4 (1966/67)
　　〃 *Bulletin of the Center for Southeast Asian Studies* (1964年10月発刊)
　　No. 1 (1963/64)～No. 3 (1965/66)

Ⅲ　Reports on research in Southeast Asia (1966年3月発刊)
　　Natural science series No. 1; Takashi Sato, *Field Crops in Thailand*, 1966.
　　Natural science series No. 2; Tadayo Watabe, *Glutinous Rice in Northern Thailand*, 1967.
　　Social science series No. 1; Kiyoshige Maeda, *Alor Janggus, a Chinese Community in Malaya*, 1967.

Ⅳ　Symposium series (1965年12月発刊)
　　Ⅰ　*Rice Culture in Malaya*, 1965.
　　Ⅱ　*Japan's Future in Southeast Asia*, 1966. (絶版)
　　Ⅲ　*Water Resource Utilization in Southeast Asia*, 1966.

Ⅴ　東南アジア研究双書 (1966年4月発刊)
　　第1巻　棚瀬襄爾著『他界観念の原始形態』, 1966.

Ⅵ　雑
　　HRAF (Human Relations Area Files の解説), 1965.

規　　程

国立学校設置法施行規則（抄）

（東南アジア研究センター及びその所長）

第二十条の二　京都大学に，東南アジア地域に関する総合研究を推進するための組織として，東南アジア研究センターを置く。

2　東南アジア研究センターに所長を置き，教授をもって充てる。

京都大学東南アジア研究センター管理委員会規程

（昭和40年4月27日達示第8号制定）

第一条　京都大学に東南アジア研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

第二条　管理委員会は，東南アジア研究センター（以下「研究センター」という。）に関する次の各号にかかげる事項を審議する。

一　所長の選考および任期に関すること。
二　教官の人事に関すること。
三　規程，内規等の制定および改廃に関すること。
四　年次研究計画および予算に関すること。
五　その他研究センターの管理運営に関する重要事項

2　管理委員会は，研究センターの毎年度の研究報告および決算報告書を提出させるものとする。

第三条　管理委員会は，次の各号にかかげる委員で組織する。

一　学部長
二　教養部長
三　関係研究所長
四　研究センター所長

2　前項第三号の委員は，総長が委嘱する。

第四条　管理委員会に委員長および副委員長を置く。

2　委員長および副委員長は，委員の互選によって定める。

3　委員長および副委員長の任期は，2年とする。

第五条　管理委員会は，委員長が招集し，議長となる。

2　前項の招集は，年一回以上行なわなければならない。

3　2名以上の委員から審議事項を示して管理委員会の開催を求められたときは，委員長は，すみやかに管理委員会を招集しなければならない。

4　副委員長は，委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，その職務を代行する。

第六条　議案は，前条第3項に定める場合を除き，委員長が管理委員会に付議する。

第七条　管理委員会は，委員の4分の3以上が出席しなければ開会することができない。

第八条　管理委員会の議事は，出席者の3分の2以上の多数で決する。

第九条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者に出席を求め，意見を聞くことができる。

第十条　管理委員会の事務を処理するため幹事若干名を置き，総長が委嘱する。

第十一条　前各条に定めるもののほか，議事の運営その他の必要事項は，管理委員会が定める。

附則

1　この規程は，昭和40年4月27日から施行し，昭和40年4月1日から適用する。

2　京都大学東南アジア研究センター規程（昭和38年達示第1号）および京都大学東南アジア研究センター管理委員会規程（昭和38年達示第2号）は，廃止する。

東南アジア研究センター組織内規

第一条　この内規は，東南アジア研究センター（以下「研究センター」という。）の内部組織について必要な事項を定める。

第二条　研究センターに運営委員会を置く。

2　運営委員会は，研究センターの業務の運営に関する事項を審議する。

3　運営委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　所長
二　専任の教授
三　関係部局長から推せんされた教授各1名
四　研究担当教官のうちから所長が委嘱した者

4　前項第四号の委員の数は，同項第三号の委員の数の3分の1をこえてはならない。

5　第3項第3号および第4号の委員の任期は，1年とする。ただし，再任を妨げない。

6　運営委員会は，所長が招集し，その議長となる。ただし，所長に事故があるときは，総務部主任たる委員が議長となる。

第三条　研究センターに総務部，人文・社会科学部および自然科学部を置く。

2　部の業務は，次の各号に定めるとおりとする。

一　総務部　研究交流計画，研究者養成計画の立案，実施および連絡調整ならびに研究資料の収集，整理および保管等に関すること。
二　人文・社会科学部　人文・社会科学的調査研究の立案，実施および連絡調整に関すること。
三　自然科学部　自然科学的調査研究の立案，実施および連絡調整に関すること。

第四条　部に主任および副主任を置く。

2　主任および副主任は，運営委員会の議を経て，委員のうちから所長が委嘱する。

3　主任は，部の業務を総括する。

4　副主任は，主任を補佐し，主任に事故があるときは，その職務を代行する。

第五条　人文・社会科学部および自然科学部にそれぞれの調査研究計画の遂行上必要な場合には，班を置く。

2　班はそれぞれの調査研究計画を立案し，実施する。

3　班の組織については，運営委員会の議を経て所長が定める。

第六条　調査研究計画の効率的な実施をはかるため，必要に応じて所長は，専任教官および研究担当教官による合同会議を開くものとする。

第七条　研究担当教官は，関係部局長の推せんのあった者につき運営委員会において選考する。

第八条　所長は，運営委員会の議を経て他大学の教官等に研究協力を依頼することができる。

第九条　所長は，運営委員会の議を経て大学院学生等に調査研究の機会を与えることができる。

第十条　この内規の運用に関する細目については，運営委員会の議を経て所長が定める。

附則

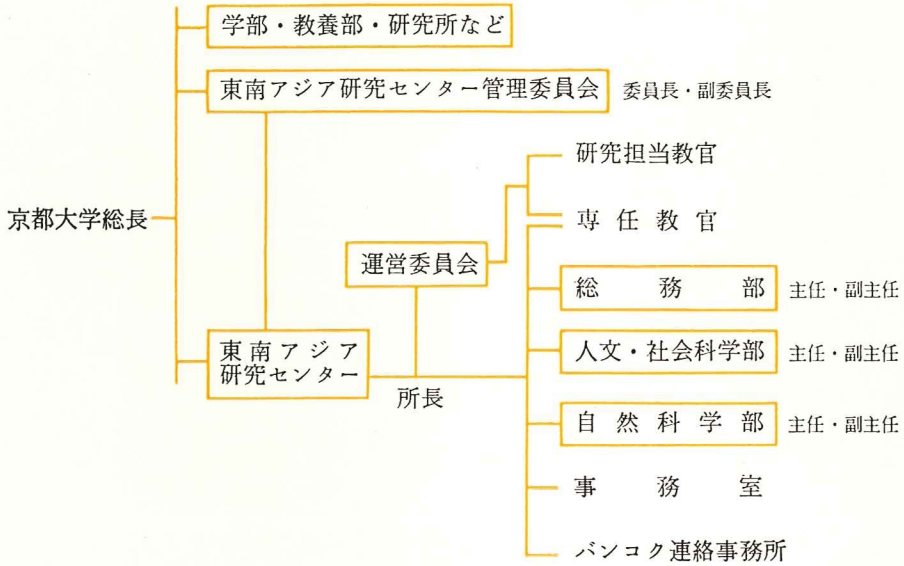
1　この内規は，昭和40年5月11日から施行し，昭和40年4月1日から適用する。

2　東南アジア研究センター組織運営内規（昭和38年6月4日制定）および東南アジア研究センター運営協議会内規（昭和38年6月4日制定）は，廃止する。

附則

この改正内規は，昭和41年5月24日から施行する。

東南アジア研究センター機構図



東南アジア研究センター管理委員会

委員長	薬学部長	上尾庄次郎
副委員長	法学部長	長濱政壽
委員	文学部長	大山定一
〃	教育学部長	鯵坂二夫
〃	経済学部長	出口勇蔵
〃	理学部長	芦田譲治
〃	医学部長	山田肇
〃	工学部長	前田敏男
〃	農学部長	小林章
〃	教養部長	羽田明
〃	人文科学研究所長	森鹿三
〃	防災研究所長	石原藤次郎
〃	東南アジア研究センター所長	岩村忍
幹事	庶務部長	石川高稔
〃	経理部長	西間木久郎

東南アジア研究センター運営委員会

所長	人文科学研究所教授	岩村忍（社会科学部主任）
委員	文学部教授	泉井久之助
〃	教育学部教授	相良惟一（総務部副主任）
〃	法学部教授	猪木正道（社会科学部副主任）
〃	法学部教授	溜池良夫
〃	理学部教授	芦田譲治（自然科学部主任）
〃	医学部教授	藤原元典
〃	医学部教授	美濃口玄
〃	医学部教授	西占貢
〃	薬学部教授	木島正夫
〃	工学部教授	瀧本清
〃	農学部教授	四手井綱英（自然科学部副主任）
〃	農学部教授	川口桂三郎
〃	教養部教授	吉井良三
〃	結核胸部疾患研究所教授	内藤益一
〃	防災研究所教授	山口真一
〃	東南アジア研究センター教授	本岡武

（1967年6月30日現在）

目　　次

はじめに …… 1

1966年度事業の経過 …… 2

調査研究事業 …… 2

Ⅰ　現地調査 …… 2

A　社会科学部門 …… 2

1　タイ地域調査 …… 2

2　マレーシア地域調査 …… 2

3　政治構造と法律にかんする研究 …… 2

B　自然科学部門 …… 3

1　医薬班 …… 3

2　地学班 …… 5

3　農業生産班 …… 5

Ⅱ　研究例会 …… 8

Ⅲ　調査研究計画のための予備調査 …… 8

Ⅳ　バンコク連絡事務所 …… 8

養成事業 …… 8

交流事業 …… 9

図書資料整備事業 …… 10

出版事業 …… 10

1967年度事業の展望 …… 15

調査研究事業 …… 15

Ⅰ　現地調査 …… 15

Ⅱ　第2期計画のための予備調査 …… 18

養成事業 …… 18

交流事業 …… 18

図書資料整備事業 …… 19

出版事業 …… 19

建物新築 …… 19

おわりに …… 19

東南アジア研究センター研究担当教官名簿 …… 20

東南アジア研究センター学外研究参加者名簿 …… 22

東南アジア研究センター刊行物リスト …… 23

東南アジア研究センターにかんする規程 …… 24

東南アジア研究センター管理委員会名簿 …… 表III

東南アジア研究センター運営委員会名簿 …… 表III

京都大学東南アジア研究センター
京都市左京区吉田下阿達町14
昭和42年6月30日発行

表紙：カレン族の少女